

2020年5月17日（日）復活節第6主日

銀座教会 主日家庭礼拝

礼拝招詞

「苦難のはざまから主を呼び求めると 主は答えてわたしを解き放たれた。
主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう。人間がわたしに何をなしえよう。
主はわたしの味方、助けとなって わたしを憎む者らを支配させてくださる。
人間に頼らず、主を避けどころとしよう。」 詩編 117：5～9

主の祈り

天にまします我らの父よ、願わくはみ名を崇めさせたまえ。
み国を来らせたまえ。みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧を今日も与えたまえ。
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。
我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。
国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり。 アーメン

讃美歌 191 いともとうとき 主はくだりて

聖書 エフェソの信徒への手紙 3章 1～7節

1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているわたしパウロは……。 2 あなたがたのために神がわたしに恵みをお与えになった次第について、あなたがたは聞いたにちがいありません。 3 初めに手短かに書いたように、秘められた計画が啓示によってわたしに知らされました。 4 あなたがたは、それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、わたしがどのように理解しているかが分かると思います。 5 この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでしたが、今や“霊”によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。 6 すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。 7 神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。

牧会祈禱

天の父なる神さま。私たちは家庭礼拝を続けて6週目の主の日を迎えました。場所は異なっても、神の家族である兄弟姉妹が心を合わせ祈る幸いを感謝いたします。教会員一人一人の日常生活が主の憐れみにより守られていますこと感謝いたします。生活が困難な方々があります。主が傍らにおられる気付きをお与えください。

私たちは神さまの憐れみにすがりつつ歩んでいます。愛する友との再会を待ち望みます。一人一人が神さまを見上げて隣人を愛し祈る者としてください。新型コロナウイルスと戦う最前線におられる医療従事者のために感染者とそのご家族のために、主の助けと癒やし

とをお与えください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通してお祈りいたします。アーメン

聖歌隊奉唱　いかで知り得ん（チャールズ・ウェスレー讃美歌）

説教　「共に一つの体に属す」

近藤勝彦牧師

人間には誰にもその人らしい生き方があるのではないかと思います。ただ、それがまだ分からない、あるいは分かっていたつもりが、分からなくなったという場合もあるでしょう。そこで、どういう生き方が自分の本当の生き方と言えるのか、それを探し求めている人も多いのではないかと思います。その人らしい生き方が確かに身についている場合、その人の信仰の姿勢が関係し、信仰がその人の人生の形を造っていると言えるのではないのでしょうか。

今朝の聖書の箇所はエフェソの信徒への手紙3章のはじめですが、一節は「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているわたしパウロは」という書き出しになっています。「キリスト・イエスの囚人となっているわたし」という表現は、キリストの使徒パウロが自分を語った言葉として他の手紙にも出てきます。フィレモンへの手紙の中に同様に「年老いて、今はまた、キリスト・イエスの囚人となっている、このパウロが」（フィレ9）と記されています。「囚人」は、文字通り、牢獄に入れられ、鎖につながれている人です。パウロはそれを自分らしくない生き方とは考えず、むしろまさに自分らしいとあり方のようには確信をもって語っています。「囚人」という在り方は、通常で言えば、辱めを受けた惨めな状態です。自分が持っていたあらゆる社会的な位置や尊敬も、また多くの人との人間関係も奪われた状態です。しかしパウロは其中でまさしく自分らしく、キリストを証し、福音に仕え、使徒としての生き方を発揮していました。逃亡奴隷であったオネシモをはじめ、獄中のパウロから伝道された人が何人もいたようです。ですから、パウロは自分を「キリストの使徒」「キリストの僕」とも言い表しましたが、「キリスト・イエスの囚人」とも語ったのです。その中にキリスト・イエスに深く結ばれた自分の姿を見ていたと思われまます。「囚人」という恥辱の姿も、その本当の理由はイエス・キリストにあって、「キリスト・イエスの囚人」と呼びました。この表現に、喜びと確信のある生き方が感じられます。この手紙を受け取った人々は、ほとんど皆パウロにじかにあったことのない人たちでした。しかしその人々の中にも、キリスト・イエスの囚人という表現がパウロとは何者かを一番よく示す表現として理解されたと思われまます。

パウロがキリスト・イエスの囚人になったのは、キリストのため、そしてその福音のためでした。7節には、「神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜わり、この福音に仕える者としてくださいました」とあります。彼が「囚人」とされたのは、神が無力であったからではありません。そうでなく、神がその力を働かせたことに

よりも。そして使徒パウロを用いて、その救いの計画を実現していることの現れでした。パウロはまた、キリスト・イエスの囚人になったのは、「あなたがた異邦人のため」と言いました。「あなたがたのために神がわたしに恵みをお与になり、あなたがたのためのキリストの囚人になった」と言うのです。

エフェソの信徒への手紙には「秘められた計画」という言葉が何度か出てきます。「秘められた計画」はミステリーという言葉で、「奥義」とか「秘義」を意味します。そのキリストのミステリーは、キリスト以前には誰にも知らされていなかったのですが、いまや使徒たちや預言者たち—ここで預言者たちというのは、旧約の預言者たちではなく、初代教会の説教者たちです—に啓示され、そして周囲に伝えられました。それが「神の救いの計画」であり、その中に異邦人たちが重要な存在として含まれています。つまり異邦人を含めた救いがキリスト・イエスによって実現した神の御計画なのです。パウロはそれを異邦人たちに伝えました。その結果、パウロはユダヤ人たちから命を狙われ、しばしば投獄されたわけです。キリストが十字架に架かって救いを果たしたのは、異邦人のためでもあったのです。キリストの奥義である神の救済計画が異邦人の救い、異邦人である私たちの救いも含んでいたのです。パウロは「異邦人のために」ユダヤ人によって投獄されたのです。異邦人の救いのためにパウロは、囚人になりました。「あなたがた異邦人のためにキリストの囚人になった」とパウロが語ったのは、その通りだったのです。異邦人の救い、つまりはキリストの十字架の救いが、パウロを何度も投獄させたこととなります。キリストが十字架に架かって果たしてくださった救いが、パウロを投獄させ、パウロは囚人とされました。

それでは、その救いはどのような救いでしょうか。キリストの奥義であり、パウロが囚人になってまで伝えた異邦人の救いとは何か、聖書は独特な表現で記しています。私たちが救われるのはどういうことでしょうか。聖書は「共に」という言葉を使って語っています。6節にこう言われます。「すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです」。救われるということは、「共に」ということだと言い、その「共に」を三つの言葉で語っています。第一は、「共に受け継ぐ者」です。救われるというのは、「共に受け継ぐ者」にされることです。「一緒に受け継ぐ」と訳されています。「共に」は「一緒に」と言ってもよいでしょう。「共に」はスンという小さな接頭語です。例えば「シンフォニー」とか「シンパシー」という言葉があります。そこにスン、あるいはシンが入っています。「共に」でなければシンフォニー（交響曲）になりません。また「共に」があって、シンパシー（同情）が成り立ち、共感が起こります。「共に受け継ぐ」というのは、キリストによる救いによって、イスラエルに約束された神の民の特権や資産、総合的に言えば神の国を「共に受け継ぐ」ことです。そこに救いがあります。ですから、救いとは「共に」のことだと言ってよいわけです。「共に」は愛があるから「共に」です。赦しがあるから「共に」です。敵対では「共に」は成

り立ちません。イエス・キリストの十字架における贖いが、敵意や隔ての壁を取り除いて、神と「共に」、また他者と「共に」を打ち立て、「共に」の中に私たちを入れてくれたのです。

救いの第二の表現の「共に」は、「共に一つの体に属す」です。「同じ体に属する者」と訳されています。救いとは、「共に一つの体に属する者」にされたことです。「体」は「ソーマ」と言いますが、聖書はここで「共に」を意味する「スン」と「体」を結び合わせて、「共に体」あるいは「共なる体」（スゾーマ）という独特な言葉を使用しています。「共同体の救い」とでも言いましょうか。「体」は、もちろん「キリストの体」であり、教会です。その体を「共なる体」に「共同体」としてそこに共に属するということです。それはユダヤ人と異邦人が一つのキリストの体に造り替えられたことを意味します。異邦人を欠いて「体」は成り立たないのです。あなたがたを欠いて、キリストの体は成立しません。そういう深いキリストとの結合、神のための結合の中に入れられています。それが救われているということです。洗礼の大切さを改めて思わせられます。

第三はキリストの「約束と共に」あずかる者になることです。共に受け継ぎ、共に一つの体に属し、共に約束にあずかることが、神の秘められた計画にある救いです。キリストに結ばれ、神にこの上なく近く身を寄せることのできる者たちとして、互いに一つの御国を受け継ぎ、一つの体に属し、一つの約束にあずかる者とされました。それがイエス・キリストにあって聖霊によって啓示された救いであり、この救いを受けて伝えた使徒は喜んで「キリストの囚人」になったのです。

救いは三つの「共に」で表現されました。そのいずれも重大ですが。今朝は特に、二番目に言われた「共なる体」「共に一つの体」という救いの表現に注意をしたいと思います。ここにエフェソの信徒への手紙の主題が示されていると思われるからです。エフェソの信徒への手紙は、1章、2章と信仰の本質的な内容を語ってきました。三位一体の神と神の深遠な選びのこと、そして神の救いの御計画のこと、キリストにあってすべてのものが一つにされるという奥義が語られてきました。そしてキリストの十字架の贖いによって敵意が滅ぼされ、隔ての壁が取り壊され、「一つの体としての教会」が造り出されたと言ってきました。一つの霊に結ばれた一つの体である教会が御父に近づくと言うメッセージがこの手紙の中心に響いています。今朝の箇所「共に」、「共に受け継ぎ」「共に一つの体に属し」そして「共に約束にあずかる」ということも、教会の一致を語り、共に一つの体に属すことで「一つである教会」を語っています。一つの体である教会に「共に」あるのは、キリストの十字架と神の愛により、一つの霊によります。そこから喜びと力が湧いてきます。

コロナウイルスの感染防止のため、私たちはいま、離れ離れになって、主日礼拝もそれぞれの家庭や部屋に分かれて礼拝しています。しかしそれは「共に一つの体に属す」神の救いの御計画によって成り立っています。「共なる体」を今は、目に見える集合体によって表現することはできません。しかし「一つである教会」に「共

に属している」ことを私たちは皆、信じています。そしてできる限り早く、目に見える仕方でも一つに集って、キリストの体に加えられる洗礼式を祝い、聖餐式にあずかりたいと願っています。「共に一つの体に属す」という救いのために、使徒は投獄され、囚人とされることも喜びとしました。投獄されても孤独ではなかったのです。いよいよ「共に」の中に生かされたのです。使徒の信仰は、私たちの信仰でもあるのではないのでしょうか。祈りましょう。

〔祈祷〕 憐み深き天の父なる神様、御言葉によって「共に一つの体に属す」という救いを知らされ、感謝いたします。主イエス・キリストの贖いによって主の御体の中に加えられておりますことを感謝します。この救いをさらに深く身に刻むことができますように、導いてください。所を隔てて礼拝している銀座教会のすべての兄弟姉妹の上に、あなたの憐みがありますように。またコロナウイルスの災いが抑えられ、一日も早く、正常な礼拝に復帰することができますように、導いてください。世界各地の教会、特に厳しい試練の中にある地域の教会の上に、あなたの慰めと励ましがありますように、また病いの苦しみの中にある人々の上にあなたからの癒しが、治療や看護のために労苦している人々の上に、あなたの慰めが、そして諸地域のリーダーたちあなたからの知恵と力づけがあたえられますように、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

祈 禱（各自、自由にお祈りください）

祈禱課題 主の日の礼拝、教会堂に集まる日をお与えください
病の中で苦しむ方々、医療従事者のために
全国の教会が祈りを結集し、困難を乗り越えることができるように

讃美歌 385 うたがい迷いの 闇夜について

献 金

頌 栄 544

祝 禱 安心して行きなさい。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。

アーメン